

Title	上代における疑問推量の表現 : 和語と漢語の意味領域と語法的相関
Author(s)	是澤, 範三
Citation	語文. 2001, 75-76, p. 3-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68971
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

上代における疑問推量の表現

——和語と漢語の意味領域と語法的相関——

是 澤 範 三

はじめに

本稿にいう疑問推量の表現とは、モシに該当する副詞によって導かれる疑問表現全般をさす。これは広義の疑問表現の範疇に含められるものであり、その形式と内容による分類を用例とともに示す次のようになる。

①内容的疑問（説明要求）

是時流水問「樹神」言、「此魚頭數為有幾何」。

（『金光明最勝王經』卷九）

②肯否的疑問（判定要求）

問レ婢曰、「若人有二門外」哉。」（『古事記』上巻）

③選択的疑問（選択要求）

於レ是、奇異疑思、「若経短矣、若函延矣。」

（『日本靈異記』中巻第六）

これらはさらに質問表現と疑惑（疑い）表現とにわけて考えられる。なお、③の選択的疑問は②の肯否的疑問が二つ以上並べられた疑問形式であることから、「若」によるこの表現に自ずと並列の要素が重なってくる点は注意しておきたい。

上にあげたのは、いずれも「若」が絡む表現の例である。そして、②③の「若」により導かれる疑問推量の表現は和化漢文に特有の用法である。漢訳仏典である①（西大寺本平安初期点）の例には「為」に対する注記「若」が本邦において施され、意義とともにモシの訓みを示す。そもそも「モシカスルト」と訳しうる「若」の表現が、不定詞を伴う内容的疑問の形式をとることは基本的にありにくい。ここは「この魚の頭の数は、イッタイいくつあるのか」と解するのが適当なように、和訓モシでは馴染まない。それでは何故に「為」に対して「若」が注記されたかという点、それは「為」字の多義性にある。

「為」の訓詁については「妙法蓮華経釈為二章」(窺基撰)⁽²⁾なる、『法華経』中の「為」字のみについての解説書が中国に存し、西谷登七郎(一九五八)が「彼の土(筆者注—中国)の人士にも一般に「為」字が読み難く、卒然その義訓を把握し得なかつたからではなからうか」とその選述の動機を推察する。その書には平声に「由・求・当・得・定・被・作・是・名」の九訓、去声に「以・与・助」の三訓がある。「為」の訓詁がこれに尽きるわけではなからうが、このように多義性に富む「為」の訓釈に「若」を思いついたのは、「若」

による疑問推量が本邦においてそれだけありふれた表現になったことを意味する。⁽³⁾そして、①における「若」の施注もひとえにそれが疑問文であることによる。

仏典における「為」による疑問推量の訓読史については、平安初期以降の訓点資料を精査した三保忠夫(一九七六)、田島毓堂(一九九九)に尽くされているが、そこにみえるモシの訓の淵源は上代の和化漢文に求められる。本稿は、拙稿(一九九九・二〇〇〇)の成果をふまえ、上代における疑問推量の表現について、その表現形式がどのように受容されたかを訓読の問題として考察し、対応する和語と漢語の意味領域が相互の影響により拡大し、互字的に用いられる様相を記述する。

一 上代における疑問推量の表現

疑問表現の特徴は、それが主体的表現であり、会話文もしくは心話文として現れることがあげられよう。それはそのまま疑問推量の表現にも当てはまる。上代における疑問推量を導く和語の副詞には「モシ・ケダシ・ハタ」がある。このうちケダシ・ハタは、『万葉集』の和歌にその仮名書き例が存し、モシの仮名書き例は見えないが、孤例ながら仮設の例が『万葉集』の天平勝宝三(七五二)年、大伴家持の歌に見られ、音数律からもモシと認められる。

君之性きみ若わか久ひさ有あ婆は梅うめ柳やなぎ誰たれ与よ共とも可か吾わが纒たづ可か牟む

(巻一九・四二三八)

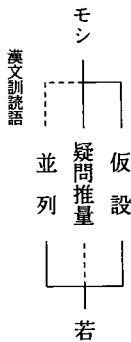
以下、モシ・ケダシ・ハタの表現について見ていくこととする。

(a) モシ

拙稿(一九九九)では上代の文献において特徴的な、和化的用法

としての「若」による疑問推量の表現について述べた。この表現は『古事記』において、その多くが質問表現として会話部に見られる。このことは、モシが仮設と疑問推量の両義を有する確認の表現であることによると考えられる。⁽⁴⁾『古事記』における「若」の例が、モシと訓みうる仮設と疑問推量、そして字訓として定着したワカを表す漢字としての三用法に限られることを考えると、「若」に対するモシの訓はかなり早い段階で定着したと考えられ、モシの並列の用法は、逆に漢語「若」の影響により生じたもの、つまり漢文訓読語と見られる。⁽⁶⁾和語であるモシと漢語「若」との関係を簡略に図示すると次のようになる。(実線は元来具有の意味用法、破線は和語もしくは漢語の用法を受け、同化されたもの。)

モシ—若



(b) ケダシ

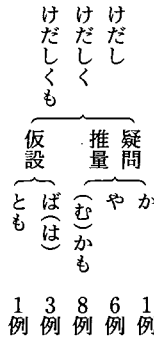
ケダシに当てられる漢字は「蓋」によるものが多い。『万葉集』では「若」と「蓋」が互字として使用されていることから、それが疑問推量を意味することが知られる。また、その左注の表記は編者の疑惑を表すとみられる「疑」字と共に熟字を構成しており、さらに明快である。⁽⁷⁾しかし、『万葉集』におけるケダシは疑問推量だけではなく仮設の用法もある。また、『新撰字鏡』(巻二)の「儻」の訓は、ケダシが仮設を表す訓として注されたものであろう。

他郎徒郎二反上設也若也
儼 譬也儼也太止比又介太志

※傍線は筆者による

そもそも漢語としての「蓋」に仮設の用法はなく、「蓋」とケダシは必ずしも用法的に合致するものではない。それは疑問推量についてもいえる。「図一」は、『万葉集』の和歌における仮設を含むケダシの語句と、句中に含まれる助詞に注目して図示したもの、以下はその分類による全用例である。

〔図一〕『万葉集』（和歌）におけるケダシ（一九例）



○疑問「くか」

馬の音のどともすれば松蔭に 出でてそ見つる 若君香跡けだまかかと

（巻一一・二六五三）

○疑問「くや」

古に恋ふらむ鳥はほととぎす 蓋哉鳴之我が思へること

（巻二・一一二 額田王）

…そこ故に慰めかねて 気田敷藻 相屋常念而あふやとおもひて 二云、公毛相哉きみもあふや

登…
夜昼といふわき知らず 我が恋ふる 情 盖 夢所見寸八こころみわらひのいさかみ

（巻二・一九四 柿本人麻呂）

琴取れば嘆き先立つ 盖毛 琴之下櫛尔 嬌哉匿有けだしくも ことこのしたびに つまやこもれぬ

（巻四・七一六 大伴家持）

なぞ鹿のわび鳴きすなる 盖毛 秋野の芽子也 繁将落けだしくも あきののぼこや しげくもろろ

（巻一〇・二二五四）

…心には火さへ燃えつつ 思ひ恋ひ息づき余り 気太之久毛 安布許等安里也等…
布許等安里也等…

○推量「くむ）かも」

百足らず八十隅坂に 手向せば過ぎにし人に 盖相羊鴨けだしらむむか

（巻三・四二七 刑部垂麻呂）

盖毛人之中言聞可毛 ここたく待てど 君が来まさぬ

（巻四・六八〇 大伴家持）

吾妹子が やどのまがきを 見に行かは 盖徒門 将返却可聞けだまぢが けだまぢが けだまぢが

（巻四・七七七 大伴家持）

吾妹子が 形見の合歡木は 花のみに 咲而 盖実尔不成鴨けだまぢが けだまぢが けだまぢが

（巻八・一四六三 大伴家持）

山科の石田の社に 幣置かば 盖吾妹尔直相鴨けだまぢが けだまぢが けだまぢが

（巻九・一七三一 藤原宇合）

冲行くや 赤ら小舟に つと遣らば 若人見而 解披見鴨けだまぢが けだまぢが けだまぢが

（巻一六・三八六八 志賀白水郎）

明日の日の 布勢の浦廻の 藤波に 气太之伎奈可受 知良之氏牟可母けだまぢが けだまぢが けだまぢが

（巻一八・四〇四三 大伴家持）

…かく恋ひば 老い付く我が身 气太志安倍牟可母

○順接仮定「くはくは」

夕々に 我が立ち待つに 若雲 君不来益者 応辛苦けだまぢが けだまぢが けだまぢが

（巻二二・二九二九）

人目多み直に逢はずて 蓋雲 吾恋死者 誰名將有裳

(卷二・三二〇五)

我が背子し 氣太之麻可良婆 思漏多倍乃 蘇低乎布良左祢 見都追志 野波牟

(卷一五・三七二五 狭野弟上娘子)

○逆接仮定「〜とも」

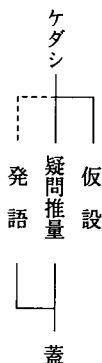
山守は 蓋雖有 吾妹之子之 將結標平 人將解八方

(卷三・四〇二 大伴駿河麻呂)

ケダシによる疑問推量のすべてが、表記の上でも明記される形で「カ」、「ヤ」、「カモ」のいずれかを下接するのは、ケダシの陳述副詞としての性格を示す。また、仮定において順接・逆接いずれもとりうる点は、漢文訓読語としてのタトヒと対応する。

ケダシと「蓋」の用法は、必ずしも合致するものではなく、「蓋」の意味は秋生徂徠が「不敢決辞」としたような、断定を避ける表現とみるのがよい。また、「蓋聞」などのような発語としての用法は和語のケダシにはなかった。これは疑問推量としてのケダシに「蓋」が当てられた結果、その訓が固定して発語の「蓋」にまでケダシが及び、漢文訓読語としてのケダシが成立したことを示唆する。ここに和語としてのケダシから漢文訓読語としてのケダシへの大きな語性的変化があったと見られよう。以上を簡略に図示すると、次のようになる。

ケダシ―蓋



漢文訓読語

(C) ハタ

『万葉集』の和歌中、ハタと訓みうる例は次の五例である。④は井手至(一九五八)の説による。

①み吉野の山のあらしの寒けくに 為当也今夜毛 我独宿牟

(卷一 七四 作者未詳)

②神さぶと 否にはあらず 八多也八多 如是為而後二 佐夫之家牟

可聞 (卷四 七六二 紀女郎)

③さ雄鹿の鳴くなる山を 越え行かむ 日谷八君 当不相將有

(卷六 九五三)

④世の中は常かくのみと思へども 半手不忘 猶恐在

(卷一一 二三八三 人麻呂)

⑤瘦す瘦すも 生けらばあらむを 波多也波多 武奈伎乎漁取跡

河尔流勿 (卷一六 三八五四 大伴家持)

ハタの例は①③の原文に見るように、その漢字表記に特徴の見える語である。そして、①の「為当」は「日本書紀」にも一箇所確認することができる。

許勢臣問王子惠二曰、「為欲留此間、為当欲向本郷。」

(『日本書紀』卷一九)

これは、仏教伝来を伝える欽明天皇紀の例である。場面は許勢臣という人物が、日本に派遣された百済の王子恵に對し、「ここ日本に滞留したいと望むか、それとも本国に帰りたいと望むか」(新編日本古典文学全集訳、以下同じ)とたずね、王子恵が、「仰せのままに従います」と答えるところ。これは疑問推量というより単なる選択的疑問と見てよいと思われる。神田喜一郎(一九三四)は、この「為当」について次のように考証した。

漢土に於て六朝時代より行はれし一種の俗語なるが、(中略)その多くが会話中に使用せられたることの注意せらるる外、その意義が、二件若しくはそれ以上の判断を示し、その択一を要求するものなることも略々察知せらるるなり。

ここらにいう俗語とは、中国口語表現ということであるが、これには松尾良樹(一九九一)の指摘がある。

後漢六朝期の漢訳仏典では、疑問文のはじめに発問の辞が多_ク用されるのが一つの特徴である。

つまり、日本においてモシ・ハタと訓まれる一連の漢語副詞は、後漢六朝期の漢訳仏典の疑問文によく見られる発問の辞というわけである。それら漢訳仏典に見られる中国口語としての発問の辞には次のものがあげられよう。¹⁾

為・当・頗・寧・審・定・竟・為当・為是・為復・當復

これら中国口語としての発問の辞には、日本においても「若」「モシ」「ハタ」の付訓がなされるものがある。そして『日本書紀』の例は、次にあげる『新日本紀』、そして、訓を有する兼右本では、上をモシ、下をハタと訓む。

・為_{モシ}・為_{ハタ}当

(『新日本紀』巻第一八 秘訓三)

このような選択的疑問が上をモシ、下をハタと訓むことは、次にあげる古記録の例などがその証左となる。また、平安初期の訓点資料群で「為_{モシ}」にモシが付訓されるものも、この疑問推量の表現がモシと訓まれていたことを示す。これには、三保忠夫(一九七六)、田島毓堂(一九九九)に詳しい調査があり、参照されたい。²⁾

又問。此文訴訟者。未_レ知。於_二争罪_一何。若_同此文哉。為_レ当_同侵奪_一哉何。(『令義解』逸文 紅葉山文庫本裏書)

国史大系『令義解』四 逸文として所収
前司時勘定所司若勘失賊。為_レ当_同任勘定所司令加増賊。

〔丹後国前維掌海成安解〕(『平安遺文』巻二一六一七)

さて、『日本書紀』にはハタと訓じられる例が九箇所確認できる。

小島憲之(一九五五)はこれらの表現について次のように述べる。

ハタは、物を二つ(また二つ以上)並べてAかBかを選択することば、一種の転換のことばであり、更に云へば、一方を一旦挙げて更にこれを抑止し、抑へながら他を挙げるわけになる。これはやがて助字「抑」に関係してくる。

このハタと訓みうる一群が「蓋」や「若」と異なる点は、選択的要素が強いこと他に、それが内容的疑問をも表現しうることである。ここでは最初に示した疑問推量の形式による分類に照らし、本質的に同じ疑問表現である肯定的疑問と選択的疑問をAとしてまとめ、モシとしてはありにくい内容的疑問をBとする。そして、疑問文ではない、「抑」に代表される発語の辞をCとして分類した。この分類に従って『日本書紀』の九例を見てみよう。(数字は日本古典文学大系の頁を示す)

A 疑問推量(肯否的疑問・選択的疑問)

①時天鈿女復問曰、「汝將先_レ我行乎、抑我先_レ汝行乎。」

(巻一 第九段一書第二) 149

②皇孫曰、「雖_二復天神之子_一、如何一夜使_レ人娠乎。抑非_二吾之兒_一歟。」

(巻一 第九段一書第二) 155

③許勢臣問_二王子惠_一曰、「為_レ当_レ欲_レ留此間、為_レ当_レ欲_レ向本郷。」

(巻一九 欽明天皇紀) 115

B 疑問推量(内容的疑問) (卷二一 崇峻天皇紀) 163

⑤百済王聖明、略以詔書示曰、「…当復何如、能建二任那。」

(卷一九 欽明天皇紀) 89

⑥遣使詔于百済曰、「德率宣文、取帰以後、当復何如。消息何如。」 (卷一九 欽明天皇紀) 97

⑦俄而蘇我臣問訊曰、「…当復何咎致二茲禍一也。今復何術用鎮二国家。」 (卷一九 欽明天皇紀) 115

C 発語(平叙文)

⑧「抑又聞二於鹽土老翁、曰」… (卷三 神武天皇紀) 109

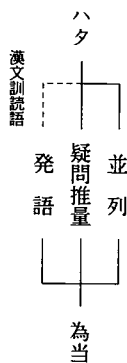
⑨「…抑有レ由焉。」 (卷一七 継体天皇紀) 27

AとCの例は、その分布が書紀区分論でいうI群(卷一)とII群(卷一四〜二一、二四〜二七、三〇)のうちに偏在する。(⑧は卷三にあるが、卷三はI群の延長上にあつてその帰属に疑問を残すことは拙稿(一九九八)三八頁に述べた。)疑問推量についていえば、II群(卷三〜一三、二二〜二三、二八〜二九)の疑問推量の表現は「若」によつてゐるものもあり、このことは述作者の問題と無関係でなからう。AとCの例は、それが中国語文のありかたと類似する点で、I・III群の特徴をなし、それがハタと訓まれることは、ハタの漢文訓読語としての性格を示唆する。小島憲之(一九五五)はそのようなハタの性格を指摘する。

ハタは種々の漢籍の文字を一つの国語に代表させたものであつて、現代語一つを用意しただけでハタの意味内容を網羅することはできない。原義が動かされない限りは口語訳としてはそれの場合に言換えをしてよい。

以上を図示すると、次のようになる。

ハタ→為当



二 和語と漢語の意味領域と語法的相関

一連の副詞「若」「蓋」「為当」は「表一」のようにまとめられる。
 「表一」漢語と和語

副詞	位相	
若	和化的用法	モシ
蓋	正格用法(中国語)	ケダシ
為当	正格用法(中国口語)	モシ・ハタ

※③「為当」は「為・頗・当・將・為復・当復」などを含み、代表させたもの。

次に、対応する和語と漢語の意味領域が相互の影響により拡大し、互字的に用いられる様相として図示したのが「表二」である。

モシ・ケダシ・ハタ→三者に共通する疑問推量を軸として、矢印は漢語、もしくは和語における意味用法が拡大していることを示す。この用法の同化ともいえる拡大は、結果として漢文訓読語、もしくは和化的用法として位置づけられる、新たに付加された語法であ

る。

「表2」和語と漢語の意味領域と語法的相關

	仮設	疑問推量	並列	発語
① モシ	○	○	△	×
② ケダシ	○	○	×	△
③ ハタ	×	○	○	△
① 若	○	▽	○	×
② 蓋	×	○	×	○
③ 為当	○	○	○	○

△漢文訓読語 ▽和化的用法

おわりに

肯否的疑問が複数並べられた疑問形式である選択的疑問には自ずと並列の意味も重なってくることから、和語であるモシの並列の用法は、漢語「若」の並列の用法により生じたと考えられる。『古事記』では、並列の用法を有する「或」が、同じ並列の用法を有する「若」の影響により、仮設として応用されたと考えられる例がある。次にあげる例は、呪詛の表現に「或」が用いられたものであり、前者が『古事記』、後者がその表現に該当する『日本書紀』の例である。

或天若日子不_レ誤_レ命為_レ射_二惡神_一之矢之至者、不_レ中_二天若日子_一、或有_二邪心_一者、天若日子_二於此矢_一麻賀礼。(『古事記』上) 67

「若以_二惡心_一射者、則天稚彦必当_二遭害_一。」
 「若以_二平心_一射者、則当_二無恙_一。」

(『日本書紀』卷二 第九段一書第一) 145

この呪詛は、「もしAならばBならむ。もしAならばBならむ。」というように、対句形式の条件表現を構成する。ここは国譲りの場面、天照大神がアメワカヒコの裏切りを返矢により確認する場面である。

ここに、仮設の「若」ではなく「或」が用いられることには理由がある。すなわち、『古事記』においてはその表現中すでにアメワカヒコの表記として「若」を使用することから、意味を異にする「若」の隣接を回避する結果、変字がなされ、また、並列表現であるという点で、漢語のレベルで意味的に共通する並列の「或」を用いたのであろう。このところ、兼永本、寛永版本が「アルハ」、延佳本が「モシクハ」など並列の意味での典型的な訓読をするのに対し、宣長が『古事記伝』において「或は、ニツ共に母志と訓べし」と指摘するのは、『古事記』の用字原理をとらえた訓みの提示がなされている点で評価すべきであろう。この用字は、対応する和語と漢語の意味領域が相互の影響により拡大し、互字的に用いられた一例としてとらえられるものである。

注

(1) 「若」による疑問推量の表現については拙稿(一九九九)を参照されたい。

(2) この資料については、田島敏堂(一九九九)に詳細な考察と影印(叡山文庫蔵)がある。

(3) 「若」による疑問推量の表現は、上代においては『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』にその用例が存し、下って『日本書紀』や『令集解』所引

注釈書、「入唐求法巡礼行記」など本邦説話資料や古記録にも散見する。
(4) 仮設と疑問との関係については、斯波六郎(一九四七)の説を紹介する。

もともと確認の意味を表はす「為」が、一方では仮定の象徴として用ひられ、亦他方では疑惑の象徴として用ひられるのは、いかなるわけか。思ふに仮定するといふことは、疑惑しながら仮定することに外ならず、疑惑するといふことは、仮定しながら疑惑することに外ならないのではないか。即ち仮定するといふことと、疑惑するといふことは、その本質において相通するのである。そして仮定も疑惑もともに確認に到達しようとする過程そのものなのである。

同様のことについて、呂叔湘(一九四一)四二五頁、西谷登七郎(一九五八)七七頁、拙稿(一九九八)二二五頁を参照。

(5) 小林芳規(一九七〇)、拙稿(一九九八)参照。
(6) 漢語「若」の訓義は多義にわたるが、基本的な意味の展開は、「神がその祈りに対して承認を与えること、すなわち諸の初文(白川静「字統」)を本義として、以下のように解するのがよい。

「したがう」↓「そのとおりになる」↓「だいたいそのようになる」(かくのごとし)↓「そのようなことになると」↓「もしも」(もし)↓「もしかしたら」↓「または」(もししくは)。「日本語の歴史」2(平凡社)六六頁

(7) 「万葉集」左注の例は、次のようなものである。

右二首、今案不似御井所作。若疑當時誦之古歌歎。(巻一・八三)

右一首、今案不似移葬之歌。蓋疑從伊勢神宮遠京之時、路上見花感傷哀咽作此歌乎。(巻二・一六六)

(8) 山田孝雄(一九三五)を参考にした。

(9) 获生徂徠「訓譯示蒙」(巻四)には次のようにある。

蓋「不」敵決「辭」ナリ。「語」ノ「辭」トモ註シ。又「詞」トモ註シ。又「大」ノ「詞」トモ見ヘタリ。然レドモ、三説トモニ當ニ非ズ。(中略)諸書ヲアツメテ、何レヘモ通ズル註解ハ、何レソト云フニ、性理群書ノ補註ニアル不敵決「辭」云々の當ナルベシ。因ハ、堤ノアタリテ、水ノフキト出ツルコトナリ、故ニ「不」敵決「辭」トモ意得ベシ。大形ハ、愚按ヲ述ルトキニ、謙退シテ置ク字ナリ。必シモ、「詞」トモハ見ヘドモ、何様ニオク字ナリ。倭辨ニナラバ、推風「下」云フ意ナリ。(以下用例略。合字などは現代のカタカナになおした。)

(10) 「蓋」とケダシの意味・用法については拙稿(二〇〇〇)を参照された

い。
(11) 左注に「右一首、或云、天皇(筆者注「文武天皇」)御製歌」とある。

(12) 神田喜一郎(一九三四)、森野繁夫(一九七五)、松尾良樹(一九八七)、西谷登七郎(一九五八)、大坪併治(一九七九)を参照。また、小島憲之(一九六四)は他に「將・豈・抑」をあげるが、これらは口語性をもたないという。

(13) 三保忠夫(一九七六)は、疑問推量としての「為」が、訓読史上、平安初期まではモシ、平安中期以降サダメテ・マサニなどと訓まれることを指摘される。また、田島敏堂(一九九九)注五・一八七―一九七頁には、この表現の用例が先行研究とともに網羅されて便利である。本稿もこれらの字恩を蒙った。

(14) 「日本書紀」の区分については榎本福寿(一九九二)による。
(15) 発語の例としては「若夫」蓋夫の例が正格用法として存することから、表中あるいは「若」に発語の用法を認めるべきかもしれない。

参考論文

井手 至(一九五八)「万葉語」はたの意味用法をめぐって―附「平手不

忘」の解明―」(「万葉」二七)

榎本福寿(一九九二)「日本書紀の使役表現」(「仏教大学文学部論集」七七)

大坪併治(一九七九)「將」の字の一用法について」(「訓点語と訓点資料」六二)

(一九八二)「平安時代における訓点語の文法」(風間書房)

春日政治(一九四二)「西大寺本金光明最勝王經古点の研究」(勉誠社)

神田喜一郎(一九三四)「日本書紀古訓考証」(歴史と地理)三四―四五合

併号など。全集II所収)

(一九五二)「万葉集は支那人が書いたか」續貂」(「国語国文」二

一一一。全集VIII所収)

小島憲之(一九五四)「訓読の窮屈さ」(「訓点語と訓点資料」三三)

(一九五五)「万葉語「ハタ」の周辺」(「万葉」一六)小島(一九六

四)所収

(一九六四)「近代日本文学与中国文学」中「為当」考)

小林芳規(一九七〇)「上代における書記用漢字の訓の体系」(「国語と国文学」四七一―〇)

斯波六郎(一九四七)「為當考」(「漢文学紀要」一)

田島鑑堂（一九九八）『法華経為字和訓の研究』（風間書房）

西谷登七郎（一九五八）『六朝訳経語法』の一端——増巻阿含経を中心とし

て——（『広島大学文学部紀要』一四）

松尾良樹（一九八七）『日本書紀』と唐代口語（『和漢比較文学』三）

——（一九九二）「訓点資料を読む——仏典の口語表現を中心に——」

（『叙説』一八）

三保忠夫（一九七六）『訓読語法史に於ける疑問の副詞「為」の訓について』

（『大坪併治教授退官記念国語史論集』）

森野繁夫（一九七五）『六朝漢語の疑問文』（『広島大学文学部紀要』三四）

山田孝雄（一九三五）『漢文訓読によりて伝へられたる語法』（宝文館出版）

呂 叔湘（一九四一）『中国文法要略』（文史哲出版社）

是澤範三（一九九八）『上代における「若」字使用の様相——比況の場合——』

（『愛文』三三）

——（一九九九）『上代における「若」字使用の様相——疑問推量の場

合——』（『古事記年報』四一）

——（二〇〇〇）『上代における「蓋」字使用の様相——『日本書紀』を

中心に——』（『国語文字史の研究』五 和泉書院）

使用テキスト

『万葉集』『日本書紀』以上、新編日本古典文学全集（小学館）

西宮一民編『古事記』新訂版（おうふう）、日本古典文学大系『日本書紀』（岩

波書店）、荻生徂徠『訓譯示蒙』（漢語文典叢書 第一巻所収）汲古書院

—— 本学大学院博士後期課程 ——